

のほか19面で各3人ずつ選出するが、[その際—引用者]各面長が自分の他に2名ずつ選ぶことにした³⁵

と報道している。なお、この会で高德煥が開会の辞を述べており、活動を主導していたことがうかがわれる。同日参加した発起人は43名であった。しかし、約半月後の同月27日に金陵青年会館で開かれた期成会執行委員会では、常務委員として、庶務部10名と会計部5名が選出され、「経費予算」については、

金泉面内の発起人が平均25円ずつ負担し、不足額は各面の篤志家の義捐で充当する。収金方法は常務委員に一任する

という記事が見える。³⁶資金調達方法が二転三転しており、またこの3カ月後の6月下旬に開かれた執行委員会では、「事業進行状況は意外に早く進捗」としつつも「来年3月末までには第1回の会費を収納できるはずだ」と、9カ月後に最初の徴収を予定するにとどまり、資金調達の難しさを物語っている。³⁷

こうした中、金陵青年会で初期から活動し、1927年3月の金泉高普期成会執行委員会
で常務委員に高德煥などとともに選ばれている李漢騏が、金泉出身で財産家の崔松雪から
自己の財産調査についての依頼を28年に受けたという。³⁸そして、財産を金泉高等普通学
校設立のために寄付してほしいという李漢騏や高德煥の説得が功を奏し、1930年2月23
日には、崔松雪と李漢騏の間に30万2100円の財産を寄付するという「契約書」が取り交
わされ、経済的な問題がほぼ解決した。その後総督府との交渉を経て、1931年に同校は
開校した。

おわりに

植民地期朝鮮の地方の中小都市である金泉における、初等教育状況と中等普通教育機関
の設立運動について考察を行った。

1921年に金泉面で設立された朝鮮人の金陵青年会は、一方で教育機関としての金陵学
院を運営しながら、正規の中等普通教育機関である高普設立のための活動を持続的に展開
してきた。金陵青年会の中心メンバーが、金泉高普設立期成会をつくり、運動を地域の中
で展開していたのである。しかし高普設立の財源確保は容易ではなかった。そうした中で、³⁹

35 『東亜日報』1927年3月15日。

36 『東亜日報』1927年3月29日。なお、同記事で、「提案、各面に支部を設置するが、当該面長を支部長に選び、面委員として常務に充当すること」という方案も検討されていたことがわかる。

37 『東亜日報』1927年6月25日。

38 金泉中・高等学校『松雪五十年』（1981年）35～36頁。なお、李漢騏の経歴を見ると、1925年に司法書士になったとされている（同、287頁）。

39 慶尚北道の1929年調査では、10万円以上30万円未満3名、5万円以上10万円未満23名が金泉郡の

金泉出身の資産家であり仏教信者でその財産を海印寺に寄付しようとしていた崔松雪と期成会のメンバーの接点があり、メンバーによる説得の末、財産を寄付として受けることになった。そして、慶尚北道で大邱公立高等普通学校に次いで私立金泉高等普通学校が1931年に設立されるに至った。

一方、金泉面の初等学校「普及」状況を見ると、1911年から金泉公立普通学校が運営されていたことが確認でき、その学校規模は植民地期を通じて郡内で最大であった。同校の入学者数（1年生5月時の人数）は、10年代末には100名程度だったが、20年代になると150名から200名程度へと増加していた。一方、中途退学者数の減少を意味する、学年別生徒数の差が、1920年代後半には減少した。また、10年代末から30年代初頭までの最終学年在学者数推移を見ると、10年代末は40名程度であったのに対して、20年代後半以降はほぼ150名程度を保っており、卒業者を安定して輩出していることはほぼ確実である。ちなみに、断片的な数値になるが、同校の1922年までの卒業生数は296名であり、23年になると28名増えた324名であった。金泉郡全体で見れば、それぞれ、565名、696名の卒業生が存在していたことが確認できる⁴⁰。道内で、金泉郡のみ、かつ1920年代初頭までに限った数値でも、700名近くが普通学校を卒業していたことが確認できるのである。

こうした卒業生が進学する正規の中等普通教育機関で最も近いのは、鉄道で約70kmの距離にある大邱の学校であった。1927年『東亜日報』（1927年7月11日）には、「高普期成会をみて 金泉一記者」という見出しの記事があり、「今年度に普通学校を終え上級学校に入学した学生は金泉266 永同116 尚州202 聞慶74 茂朱51 居昌55 善山75 星州28 沃川85 漆谷56 総1008人だ」と紹介されている。さらに「子女を京城や大邱に送り出し毎月三四十円という学費」を出すことの難しさと、金泉高普が設立されれば、「無産子弟のためだけでなく、有産者にも莫大な利益がある」と述べられている。このように1927年のみでも、金泉郡およびその周辺の地域で、京城や大邱など遠方の上級学校に1000人余りが進学したことを伝えている。

金泉高等普通学校は1931年の開学に際して、3月に入学試験を金泉公立普通学校で行ったが、募集定員60名に対して411名の応募があり、定数を大幅に上回る91名を合格させた。定員を超過する合格者を出したことに對して、慶尚北道学務課から学校長に「超過人員取り消し」の指示が出たという⁴¹。1931年5月末現在の1年生の数は88名であった⁴²。定員に対する応募者数の多さからも、この地域での中等普通教育への就学要求の高さが裏付けられる。

金陵青年会メンバーを中心とした、23年10月の高普設立「期成会の準備」講演会開催から数えれば、高普設立まで8年にも及ぶねばり強い金泉高普設立運動は、普通学校があ

朝鮮人資産家数として挙げられていた。慶尚北道警察部『高等警察要史』1934年、333頁。

40 前掲、『慶尚北道教育及宗教一斑』1922年版、19頁、および同23年版、18～19頁。

41 前掲、『松雪六十年史』300頁。

42 前掲、『朝鮮諸学校一覧』1931年版。なお、同校には1932年度から30年代を通じて毎年60名前後が入学し、40年に120名、41年には180名へと入学者が急増するなど、地域の中等教育機関として定着していった。

古川 宣子

る程度定着する中で、地域住民から広く中等教育機関の設立が要求されていたからこそ可能であったといえよう。

(付記)

本稿は日本学術振興会平成 18～20 年度科学研究費補助金(課題番号:18652070)による研究成果の一部である。なお、資料収集に際しては、嶺南大学の金秀姫先生に大変お世話になった。記して感謝する次第である。